

# ほほえみの地域づくりの泣き笑い

〜青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記〜

ほほえみプロデューサー講習会 始動！（6）

山本 菜穂子

平成19年11月。ここまで養成された「コア笑いプロデューサー」と「笑いプロデューサー」と共に、「ほほえみプロデューサー講習会」を始めました。

前回も書きましたとおり、私の中では、講師として動いてもらうコアと笑いの仲間たちは、私にとってまだ少し守るべき存在でした。みんなまだ、一般の人を前にして研修講師になるなどという経験をしたことはほとんど無いのですから。もし、初期に失敗して受講者から苦情を言われたり嫌な思いをしたら次はもうコアも笑いも来てくれないかもしれない。「良い評価は全員で分け合うこと、そして悪い評価の責任は私にあること」を肝に銘じよう。この段階の私の中の密かな決意。

まずは練習をさせてもらえる環境を準備したいと考え、県内6地区の県合同庁舎で、主に県職員の参加を見込んで、夕方、仕事帰りに寄ってもらえる時間の開催としてホームページや県庁職員向けインフォメーションで広報して参加者を募りました。でも、なかなか人は集まってくれません。「青い森のほほえみプロデュース」「ほほえみプロデューサー講習会」このネーミングは、ターゲットのはっきりしない、内容も想像しにくい、その意味ではまったく人を呼び集めにくい名称なのでしょう。

4人、10人といった少ない参加者の前で、スタッフの人数の方が多いような状態で講習をすることもたびたびありました。実は個人的には

ちょっと寂しかったり、ガッカリしたりという気持ちでしたが、みんなには、「一人ひとりを大切にしていって講習をする練習チャンスだね。」と話し、「今のうちに私たちも講習に慣れておかなければ」という気持ちもあり。（この時、講習依頼が増える当てなど無かったのにね。）

### <私の役割>

コアと笑いの仲間たちには練習をしてもらいながらも、私はそのまま手をこまねいているわけにもいきませんよね。人が集まらないという現実には。まあ、この時も周囲からは、動員をかけて集めるしかないんじゃないかという声も聞こえていました。でも、私、ここに関しては結構意固地になっていて。『広報しても人が集まらない』もし、この状態が続くようであれば、私たちが感じてきたこの事業の意義が、県民の想いとずれているということなのだろう。だとしたら人が集まらなくても仕方ない。人集めを強要するような方法はない。諦めよう。」と、そんなことも考えていました。

でも諦める前にできることとしてその時に意識したのは、「想いを伝える」ということでした。講習会の中で事業の目的や目指したい状態を丁寧に説明し、共感を得られるよう最大限の努力をしよう。ほほえみの7か条を伝えることと同じくらいの力点を置いて、事業のビジョン、「皆さんと一緒に、ほほえみに満ちた、あたたかくゆとりのある青森県づくり

をしたい！」ということ伝えていったのです。実はそれまでは、ほほえみプロデューサー講習会の開催に関し主役は私ではなく、コアや笑いの仲間なのだから、あまり私が表に出るのは控えようと思っていたのです。でも、その時、ほほえみ隊のSさんが、「菜穂子さんが話すべきだよ。まず、ビジョンを伝えるべきだよ。誰も、出しゃばりだなんて思わないよ。この取組が広がるためには必要なことだよ。」と助言してくれたのでした。

結果、1時間の講習の前半15分前後を、この取組に込めた想いを伝えるために使わせてもらうことにしました。ビジョンとそのために活用できる手段と一緒に提示する講習会となっていったことで、受講者にこの取り組みと一緒に参加していく意識が生まれ、後々、口コミで情報を広げてもらえることになったのではないかと考えています。

### <研修講師をするということ>

徐々に口コミで講習に呼んでいただけようになるのは年が明けて、春が近くなる頃からだったと思います。それまで、地道に練習を積みながら、私たちは実力(?)をつけていくわけです。

余談です。私自身は演劇部で、とりあえず、人前に出て大きな声を出すことの経験はあったということは以前書いたと思います。

でも、研修の講師として私を育ててくれたのは、児童相談所でした。

児童相談所に勤めて4年目くらいから。当時も児童相談所には、地域から時々研修の講師依頼が来ていました。まだ虐待が騒がれ始める前、子育て支援の役割が市町村に位置づけられる前でしたので、子育て相談に関する事、子どもの発達に関する事などの一般むけや民生委員・児童委員さんむけの講演や、教職員向けに児童相談所とはどんな機関かを知ってもらうための研修会などの依頼が来ていたと記憶しています。

当時、そういう依頼を受けると、経験年数の多い先輩の児童心理司か課長が出向いていたことが多かったと思うのですが、その頃私が所属していた児童相談所は、まだペイペイ（と自分では思っていた）の私の他に児童心理司がおらず、直属の上司は持病があってあまり外の仕事は引き受けておらず。その中で私は、次々と講師に行かされることになりました。

最初は前の日から眠れないくらい緊張して、事前に準備したことを一方的に伝えるだけで精一杯。でもそれを何回か経験すると、やっと相手が見えるようになってきて。相手の聞きたいこと、聞きやすい例示、飽きずに聞いてもらう工夫、などに配慮できるように進化していきました。聞いてくださる方を、早い段階で味方につけられると、その後とてもリラックスして話しができることなども体験的に学んできました。

当時、苦しみながら経験してきた道筋が、ほほえみプロデューサー講

習会に出向いてくれる仲間たちがたどるであろう道と重なりました。

最初は自分の伝えるべきことを一方的に伝えるだけで精一杯であるのは当然のこと。その時に私のできることは、みんなが少しでもリラックスして話せるように、集まった受講者を早く私たちの味方につけること、そして、失敗しても大丈夫だと心から思ってもらおうこと、だと考えていました。その意味でも最初にビジョンを語らせてもらえることは役に立ちました。

## <コアと笑いの

### プロデューサーの役割>

ほほえみプロデューサー講習会は、笑いプロデューサー等の仲間講習会スケジュールを示し、各自が都合のいい会場にエントリーしてもらうというスタイルで講師・スタッフをお願いしました。もちろん無償です。意欲のある仲間達が仕事の合間を縫うなどして集まってくれました。

集まった仲間達は、そこで主に「ほほえみの7か条」を伝えていくのですが、その「ほほえみの7か条」は内容もさることながら、伝え方にも、聞く人を惹きつける秘密があります。

「ほほえみプロデューサー講習会」の場でこの7か条を参加者にわかりやすく伝える方法として、高柳先生から指導を受け、私たちが心がけてきたのは、

- 1 講師側が真実を自分のことばで伝えること
- 2 受講者に体験して実感してもら

うこと

- 3 寸劇などで具体的に見てもらうこと
- 4 いずれも、受講者の年齢、性別、職業などを考慮し、どんな題材を提示するかを十分検討すること

などでした。

当初はそのシナリオの大筋を私が作成し、7か条のそれぞれの説明役、体験談を語る人、タイムキーパー、合図の鈴を鳴らす人、説明用のプラカードを持ってくれる人、寸劇の俳優さん（♪）などなどの役割をそれぞれの会場のコアを中心にそれぞれの希望をとりながら振り分け、つまずいたらいつでも私が入ってフォローする約束で始めました。

本番の1時間前には集合して、会場づくりを一緒に行い、マイクやプロジェクターなどの機材の具合を確認し、事前に知らせてあった役割で練習を行います。椅子の並べ方ひとつにしても、前の人と重なって見えなくならないように列をずらしたり、見やすさと雰囲気をつまやくするために、半円形に並べたり工夫します。それから、説明内容や話しの流れをみんなで確認し、寸劇はちゃんと立ち稽古をします。そしてできる限り暗記して（自分のことばで語れるようにして）受講者の前に立てるように準備します。終了後に渡すチラシやほほえみプロデューサーカードなども配りやすいように支度します。そのようにして本番を迎えることになるのです。もちろん、受講者が来

てくれたら、その方が緊張しないように話しかけたり、雰囲気づくりは私たちみんなの役割です。

そして講習会終了後は、その場で受講者の残してくれた感想を確認しながら、反省会を行います。

それが一連の流れです。

## <コアと笑いの育ちに

### 奏功したもの>

#### 1 手間をかけてもらうこと

時々、継続的な活動をしている団体などで、事務局のごく一部の人の負担だけが大きくて、共に活動の中心にいるはずの人が、いつまでもお客様として扱われている場面に出会います。そしてその「本当は最も身近にいてくれるはず」の「お客様」から、まず一番に文句が出る。名簿に間違いがあるとか、資料の提供が遅いとか。事務局として手間をかけている人は労われることもなく、仲間からの苦情にどんどん疲弊していくと。

ほほえみプロデューサー講習会に関し、県の取組ではあるものの、県担当職員が全て準備して講師として協力してくれる仲間たちをお客様のように迎えるということはありませんでした。これは笑いプロデューサーの講習会の頃から徐々に培ってきた方法です。

ほんのわずかなことですが、例えば一緒に椅子を並べること、配付用カードの枚数を数えること、そういうことに一緒に手間をかけてもらうことによって高まる仲間意識・凝集

性は、すべて準備の整ったところにやってくるという心地よさの何十倍も価値のあることでした。

仲間になってほしいときには、できるだけ相手に甘えてみることで私は思っています。もちろん、その時にこちらがそれよりも少し多く力を注いでいることが前提ですけれどね。

当日の準備作業を一緒に行いながら、私たち講師側はチームとしてまとまり、知らず知らずのうちに、是非、受講者に「ほほえみの7か条」を理解して帰ってほしいとの想いを強め、本番の1時間を迎えることになります。

慣れてきた後は、シナリオも私が作るのではなく、それぞれの会場の受講者に合わせて、子ども達には子ども達向けに、高齢者には高齢者向けに、その回のリーダーとなるコアや笑いのプロデューサーが工夫して作成するようになっていきます。講師として誰が参加できるのかを見ながら、どこで寸劇を使うか、どこに体験談を入れるか、工夫しながら。それだけの手間をかけながら毎回、唯一無二の会を創り上げていくのです。そして手間をかけた分だけ、その都度、相手を大事に思い、ほほえみを伝えたい、是非ほほえみの7か条を実践してほしいとの想いを強くし、発信する会になっているのです。

## 2 目指せ、笑顔の反省会

手間もかけ、一生懸命受講生に向かい合ってくれる仲間たちです。講

習会終了後の反省会では、徐々に激しいやりとりが目につくようになっていきました。寸劇のセリフを覚えてこなかったことに関して、途中で説明の意味が分かりにくくなったことに関して、受講者へのインタビューのマイクに向け方について・・・みな、真剣にやっているだけに、厳しい意見が出始めました。

このまま、こんな苦しい反省会を続けていけば、そのうち誰も講師に来たくなるのは目に見えている、そう思いました。そうやって分裂していった団体なんていくつも知っているでしょう。

だいたい、こういうことに無償で飛び込んで協力してくれる仲間たちです。基本はとても真面目で一生懸命なんです。失敗したことについては誰に何を言われなくても自分が一番よく分かっているんです。

こういうときばかりは、私の出番です。私はこの取組に関してボスなんですから。そしてやったのは、目的と方法の確認です。私たちは何をしたくてここに集まったのか、ほほえみで人と人との関係をつくり、安心して失敗をしたり安心してSOSを出せたり、そうしてあたたかい地域をつくるため。その目的のために、一生懸命勉強して受講者の前に立つ、その姿勢は無くしてはいけない、それは基本的に大事なことの一つ。でも、できていないことを相手に伝えるとき、責めるのは私たちが方法としてすべきことじゃないはず。その時にもほほえみの7か条を使いまし

よう。地域づくりなんて大きなことを語る前に、自分たちの身近な仲間との関係をほほえみで築けないのなら、ほほえみを広めることなんて無理なんです。まず、努力を認める、そして直した方がいいことがあれば伝える、そして相手がそうやってみよう、と思えるようなシメのことばをかける。PNPの実践を勉強しながら、笑顔で反省会をしましょう。と。

このことは、どの回に行ってもしつこいくらい言い続けました。私たちが理屈で述べるだけでなく、実態としてもほほえみで繋がる仲間になれたら、その時こそ、この取組は広く県民の共感を得ることができると、これは確信していましたから。だって、コアの仲間たちが一緒にやりたいと言ってくれた時、「県の担当者がほほえみで繋がっているのを見て、自分もあの仲間に入りたいと思ったから」だと教えてくれたのだから。

### 3 「失敗しないこと」にそんなに大きな意味はない

反省会の方法に触れましたが、実は、このほほえみプロデューサー講習会で講師側が失敗することは、失敗しないことよりも受講者に与える効果は高かったのです。

失敗しない人間なんていない、努力しても失敗してしまうことなんてたくさんありますよね。普段の生活の中で、失敗は糾弾されることが多い。だから、失敗したな～と思ったら怒られたり馬鹿にされたりするの

は嫌だから隠したくなります。そして、失敗を隠した、反省していない、とまた責められる。そしてどんどんエスカレートしていく。不毛。

ほほえみプロデューサー講習会で例えば寸劇のセリフを忘れてしまうなどの失敗が起こると、リーダーが「すみませ～ん。ちょっとストップします。さあ、今日は受講者の皆さんのために、今の部分をもう一度お見せできることになりました。ラッキーですね～。2度見る方が、しっかり意識して見ることができますね～。ではもう一度行きますよ。」など、失敗の前向きな意味を伝えることばを挟みます。ま、次から次へと失敗して、何が本当だかわからなくなる、なんていうほどひどければ論外ですが、1講習会に1回くらいのこんな失敗は御愛敬で、むしろ本当に受講者が意識を止めて考えてくれることに役に立つと思っています。もって行き方です。

まあその前提には、私たちは、講習のプロになるための集団ではないということがあるでしょう。別に特別な存在ではなく、あなたの隣に暮らしているだろう普通のおじさんやおばさんだけど、大事なことから聞いて欲しいんです、という仲間からのメッセージだから、「失敗しないこと」や「立て板に水のスムーズなことば運び」なんかより、一生懸命さが伝わることの方が好感が高いし、聞いてもらえる。そしてなにより「失敗を非難されない関係が今日の前に存在していること」を見てもらえる

ことの効果は絶大でした。

「失敗しないこと」について躍起になってしまうことは多いけれど、立ち止まって考えてみませんか。

「失敗しないこと」が実は最重要の課題ではないと、コアや笑いの仲間たちと共有できたことは、コアや笑いが育ち、この取組の理念が広がるためにとっても大きな収穫でした。

これも失敗してくれた仲間たちのお陰です。

さて、こうやってつくっていった活動が、「プロデューサーの皆さんの熱い思いを感じました。」「皆さんの笑顔に触れて、自分もこの7か条を実践したいと思いました。」などの感想を生むことになり、口コミで講習会が広まり始めます。

そして、平成19年11月から平成21年3月まで、私たちほほえみ隊は、結局348回を数えることになる、県内全域で開催されたほほえみプロデューサー講習会全てに同行し、コアや笑いの仲間たちと、感動を共にし、反省会を共にし、すっかりお互いに人となりを理解し、信頼関係で結ばれることになりました。「やってみせ言って聞かせて、させてみて、誉めてやらねば人は育たず」か。後半のほほえみ隊はもっぱら、自ら楽しんで、誉めてばかりだったような気がします。「自ら楽しむ」そのこと、実は取組が継続するためのとっても大きい要素なんですよ。